

# PHD LETTER

## 106

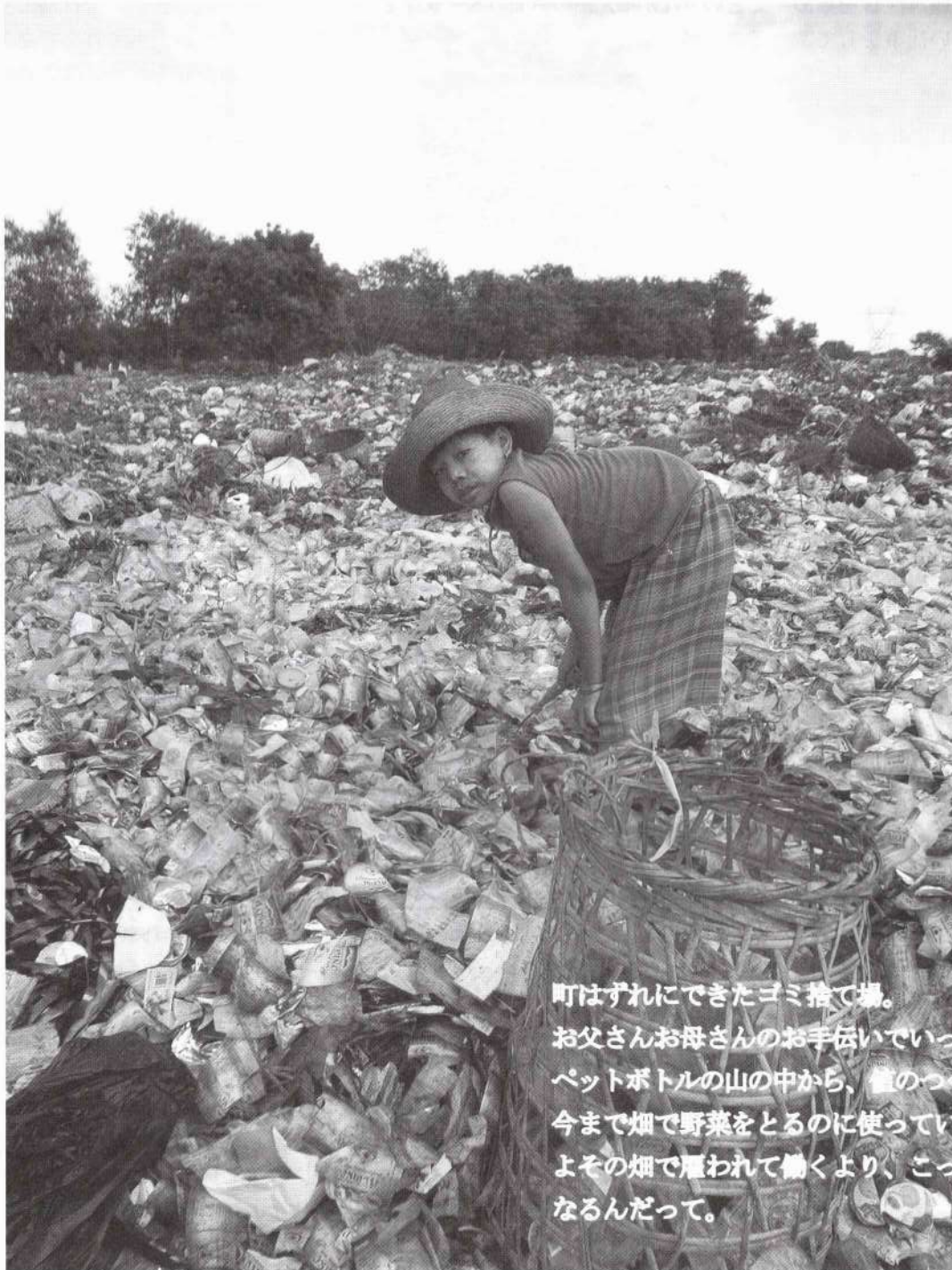
PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

2008.3

- 同じ買うなら、使うなら「中野さんの低温殺菌牛乳」
- 研修生&国内研修生レポート
- スタディツアーレポート 北タイ

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをさきあげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：藤野 達也  
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867  
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp  
URL: http://www.kisweb.ne.jp/phd  
定価：100円  
郵便振替口座：財団法人ピー・エイチ・ディー協会  
01110-6-29688



町はずれにできたゴミ捨て場。  
お父さんお母さんのお手伝いでいっしょにきた。  
ペットボトルの山の中から、値のつくもの探してカゴへ。  
今まで畑で野菜をとるのに使っていたカゴが役にたつ。  
よその畑で雇われて働くより、こっちのほうがお金になるんだって。

ビルマ マンダレー郊外 撮影：FUJINO T.

### 東西南北 問題解決 取組日記

#### 飛行機に乗ると

一年に何回か海外にでかける。そして飛行機に乗るたびに気になることがある。ひとつは燃料を使って海外へでて、それに見合うだけの仕事ができているのだろうかということ。環境問題が注目を集める今、でかけるたびにいい仕事をしてこなければと思う。

#### 今、航空会社に問い合わせ中

もうひとつは機内食のことだ。用意されたすべてをきれいに食べることは少ない。何かしら残してしまうし、安い夜行便の起き抜けの朝食は、ほとんど手をつけられない。自分がいらないと言えはいいのかわかるといえば、そうではなく、手もとに届かないだけで、カートの中におかれたまま処分されてしまうのだろう。おいしい食事は楽しみになるし、他社便との競争の中での大事な点かもしれない。好き嫌いとか、いちいちの注文をエコノミー席のお客にまで聞いていたのではめんどろだし、費用もかさんでしまうのだろう。でも、なんとかならないかと考えてしまう。さらに料理そのものだけでなく、各食ごとに用意される小袋の塩、胡椒、コーヒー・紅茶用の砂糖、ミルク、パン用のバター類も、ほとんど使わないから気になる。そのまま捨てられてしまっている気がする。一度配ったものを回収することでの、衛生面、安全面での心配もでてくるかもしれない。もし表の包装が汚れてしまったら感じが悪いのも事実だろう。値段はたいしたことではないので、こうしているのだろうか。焼石に水かもしれないが、スタディツアアの引率のときには、参加者に使わなかった分は持ち帰ろうと呼びかけている。一人一人にとっては、たまにしか乗らない飛行機ではあるけれど、毎日飛んでいるわけで、捨てる量も半端じゃないと思うのだが。ヨーロッパのある航空会社で、短距離線だろうが、各個人が空港内で食事を買って機内へもちこむ方法に切替えたことを、ニュースで紹介していた。これもひとつの手だ。

#### 新しい作物のもたらす 良い悪し

今回はその飛行機を乗り継いで北タイのチェンマイまで。そこから車で5時間西へ走った。08年度の研修生スラデさんが生まれ、生活しているところまでかけた。標高数百メートルの山が連なる地域にカレンをはじめとする山岳民族が住んでいる。ここにこの数年トウモロコシの栽培が広がっている。これまで活用することの少なかった山の斜面の木を伐採し、そこに種を播く。10月に収穫時期となり、



訪ねたときには、あちこちで機械を使った脱穀作業が行われていた。村の生活とはいえ、だんだんと現金収入が必要となってきている。自給自足に近い農業だけでは必要に満たない。ここに町の業者が家畜の飼料となるトウモロコシの栽培をもちかけた。あつという間に地域全体に広がり、道路の両側から遠くない場所は帯状に畑が続いている。たしかに収入にはつながり、村人によるこぼれているのは事実である。しかし一方で環境面での問題が心配されている。スラデさんの推薦団体カレン・バプテスト会議の代表サニーさんは、雨による表土流失で何年もこの収穫は続かないことや、土砂崩れや川の汚れも案じている。企業は次の産地を求めて移っていきけるが、村人はここに住み続ける。スラデさんの日本の研修にも、そのあたりの対策をいれてくれと頼まれている。

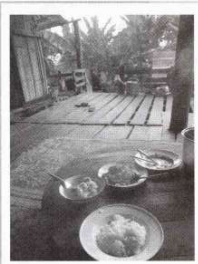
#### イチゴだけで大丈夫？

以前、同じく北タイの村に換金作物としてのイチゴ栽培が紹介され、状況を呈していることを報告した。そこにも今回、足を運び、その後の話を聞いてみた。今季はあまり出来が良くないという。村人に理由を尋ねると、気温や雨の量によるとのことであったが、もうイチゴを始めとかなりの年数になる。日本に戻り、専門家に伝えたとこ、化学肥料に頼りす

ぎの影響や、連作障害のせいではどのことだった。さらにこれまで米を作っていた田んぼを全部イチゴに切り替え、お米は買っているという話を村人から聞き、心配になった。もしイチゴが不作のときはどうするのか。食料自給率が4割を切っている日本人に心配してもらわなくてもと言われるかもしれないが。

#### 自分で作って、食べて、 始末する豊かさ

村で食事のときに、飛行機で考えたことがよみかえる。木や竹でできた家の床にはすきまがある。冬にはここからの風が冷たく感じることもあるが、このすきまが食の循環につながっている。こぼしてしまつたごはん、おかず、食べかす、魚の骨などをこのすき間に落とすと、すぐにニワトリ、犬、猫が寄ってきてきれいにしてくれる。野菜クズ、残飯は脇の小屋の豚のエサ。ゴミがでないし、食べ物を残すことにならない。家畜のフンは田畑の肥料になる。一見貧乏そうに見えるが、豊かな連鎖がある。日本ではいろいろなものを、ぜいたくに、便利に食べようとしすぎて、おかしなことになっている。食べ残し、賞味期限切れ、大量廃棄、添加物、偽装、フードマイレージをはじめとして多くの問題が存在する。それをなくそうとする小手先の工夫があるだろうが、その原因となっている「あれもこれも、過剰に、お手軽に」という欲求を考え直すことが必要だと思う。



多くの人は積極的にそうしようとしているのではなく、なんとなくその流れにのせられてしまっていることもあるだろう。ならばよくないところに気づくことで、好ましい方向を選ぶことができる。研修生の生活の中に「共に生きていくこと」を考えるきっかけがいくつもある。それをお伝えすることもPHDの役目だと思う。

総主事代行 藤野達也

#### スタディツアー報告

### 北タイ編

12月23日～1月3日



スタディツアー参加者

職員になって初めて訪れる研修生の村。今までは資料や人から聞いた事で想像することしかできなかったが、研修生たちと実際に会い、村の生活を体験して、いくつか気付かされた事があった。その中で、印象深かったことは、アンボンさん(97年度)が経営している農業資材の店で農薬が販売されていたことだった。日本で

農薬の怖さを勉強したはずなのに...と私は困惑してしまつた。本当にアンボンさんは悪いのだろうか?

日本に来た研修生たちは、農薬の怖さを知っているが、そんなことを知らないで使用している人が殆どだ。農薬の怖さを知り販売しているアンボンさんは、その使用法を指導しながら販売することで、山の人たちにできるだけ安全に農薬を使ってもらえることができる。一方的に彼が農薬を販売することが悪いとは言えない。彼の店で売らなければ、村の他の店で買うことになり、逆に危険なのだ。

一方でアンボンさんは、プリチャーさん(85年度)とタイ人男性パットさんが経営する有機農場で協働しようとして計画している。パットさんは野菜、果物だけでなくお茶、煮バナナなどの加工品や果物を使った石鹸、シャンプーもつくっている。志と知識を持った人が集まり、今後有機

農業からビジネスにつなげていってこれるだろう。それぞれ3人の知識やアイデアがどこまで広がるのが楽しみだ。現金収入がますます必要になり、いかに高くたくさん売るのが問われる中で、元研修生たちは試行錯誤を重ねながらやっている。研修生が村の人を巻き込み、自分たちで変えていく姿を見た。そんな彼らをどう応援し、どうフォローアップしていくのか、次への課題となった。

川原桂



アンボンさん(右)有機農場で作業中

### タイ帰国研修生短信

#### メーサリアン

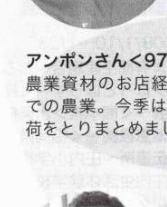
##### プリチャーさん<85年>

2007年9月にガソリンスタンドを開業。売店と食堂も併設。山岳民族のひとたちを中心に雇用。ホイルアン村で有機農業をしているパット氏の農産物を置く予定も。



##### シュキヤさん<06年短期>

2007年9月にコンピュータのお店をプリチャーさんの店の裏で開業。主な客は、公務員や子供たち。週末にはチェンマイで勉強も。



##### アンボンさん<97年>

農業資材のお店経営とホイルアンでの農業。今季は村人の大豆の出荷をとりまとめました。



##### スラチさん<02年>

ピーマン、唐辛子、にんにく、ピーナッツなどを栽培しています。有機野菜の店をしたい、いろんなグループをつくって、リーダーになりたいと意欲的。奥さんのスミナさんは、プリチャーさんのガソリンスタンドで働いています。



##### ブンシーさん<00年>

草木染手織布でタイ人が好む新しい形を思案中。ライ村の中で3ヶ月前に新しい布のグループができ、ブンシーさんもその一員。布をつくるときにお金がない人に糸を貸す活動もしています。



#### ムシキー

##### ブラチャックさん<98年>

引き続きお店と農業を営み、家のまわりでつくった野菜のうちいくつかを店で売っています。チャユーさん帰国後の協働を期待します。



#### ボケオ

##### コマさん<87年>

タロイモ・牛・苺・魚(淡水)をグループで作っています。肥料が高い、農薬が高い、収入が低いというアンバランスな面が問題だそうです。

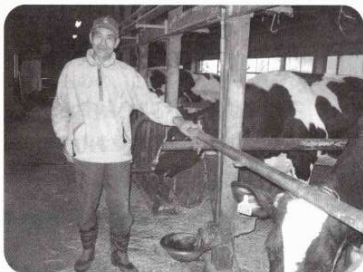




同じ買うなら、使うなら！



No.1 低温殺菌牛乳



神戸から車に乗り込み北に向かう。行き先は研修指導者としてPHD協会と関わってくださっている兵庫県丹波市春日町の農家中野宗嗣さんの家。車が北に走るとつれて白銀の世界が目の前に広がっていく・・・ホットミルクをごちそうになり、体の芯からほっとする。中野さん家の牛乳は「低温殺菌牛乳」である。一般的な牛乳は120度という高温でさっと(2、3秒)殺菌をするが、低温殺菌牛乳は65度程度でじっくりと(30分)殺菌をする。

今年度を振り返って

昨年は食品の不正表示問題が大きく取り上げられ、今年も冷凍食品による中毒事件が取りざたされています。それら事件についての事実関係の糾明はもちろん必要ですが、それだけに終始し、背景にある日本の食糧事情や今後のあるべき姿についての議論がなければ、せっかく高まった食に対する関心も一時的なブームのように過ぎ去っていくでしょう。そして、そういった根本的な問題を考えるためには、企業や消費者だけではなく、食品生産の最前線にいる個人々の意見にもっと耳を傾ける必要があると

高温でさっと殺菌する牛乳には時間がかからないという利点はあるが、本来の牛乳に含まれている「体に良い菌」まで殺してしまう。「体に良い菌」が生きたまの低温殺菌牛乳は、舌触りが濃厚でまろやか。これぞまさに本物の牛乳といったところであろうか。

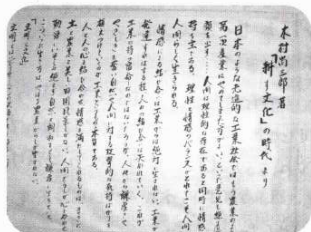
中野さんは牛乳作りだけではない。乳牛の出す糞尿で田畑を肥やし、その田畑で作物を育て、山にはヒノキを植える。このように土地を活用することで土地が荒れるのを防いでいる。農業を営みながら「環境の循環」にも気を配っている。そして、それができる畜複合農家であることに誇りを持っている。その話をしている中野さんの目はキラキラしていた。

私の祖父と祖母も淡路島で牛を飼いがながら田畑を耕している。もし中野さんに出会わなければ、祖父と祖母がどのように「環境の循環」に気を配っていたかなんて知る術もなかった。そう考えると将来、私自身が農家を継ぐことに前向きになれたのは、中野さんとその出会いを提供してくださったPHD協会の方々のおかげ

と思います。本連載は2005年に始まり、食品を主に紹介してきました。当初、製品そのものの良さを伝える企画ではありましたが、取材に応じた皆様方からそういった内容のみにとどまらず、自分の仕事にける思いや日本の農業・食糧事情などについて熱弁を振られることもしばしばでした。結果として、そういった内容を盛り込むことで昨今の食のありかたに一石を投じる形になったのではないかと思います(もっとも、紙面の制約上、生産者の思いを全て表現しきれること

である。そんな畜複合農業に取り組んでいる中野さんの低温殺菌牛乳は、私たちの体にだけでなく、そこに開く自然や環境にも優しさをもたらす。中野さんのことを思い出しながら、今日も私は冷蔵庫から牛乳を取り出す。神戸大学発達科学部3年 土井博博

「氷上低温殺菌牛乳」は神戸市内のスーパーコーヨーなどでも手に入ります。詳しくはお問い合わせください。



倉庫に貼ってある中野さんが大切にしている言葉(「耕作文化の時代」より)

お問い合わせ先

兵庫丹波酪農農業協同組合  
氷上牛乳センター  
兵庫県丹波市氷上町石生檢前162  
TEL.0795-82-6324

はかないままでしたが)。いずれにせよ、製品そのものの良さと、その後ろにある生産者の熱意やこだわりが多少なりとも伝わればと思います。また、記事を通して読者の皆様が食のあり方に対して問題意識を持っていれば望外の喜びです。

本連載は、筆者を含めたボランティアを交えて進められています。今後、もっと多くの方々、様々な立場の方々からの記事を発信していきたいと思っています。

会報編集ボランティア 菅原宗晋



カレンの村での滞在

07年の10月下旬から、PHDと20数年交流をもってきた布のグループ「チョディ」のあるチェンマイ県ムシキーに約一カ月半、「ルチョコ」のあるメーホンソン県メーサリアンに約3週間、研修生宅に滞在し、草木染・織りを学ばせてもらいました。きっかけは、昨年度私が国内研修生のときに、この地域からの研修生ポーディーヤさんと出会ったことです。その人柄と、カレンの手織り布の魅力に惹かれ、今回の滞在を決めました。

ポーディーヤさん

日本で研修中のおとなしい印象とは違い、村では実は男勝りなお母さん。日本での研修の成果は、本人曰く、洋服より農業よりなによりも日本語ができるようになったこと。ここ数年布のグループの人たちとPHDとの対話は英語か元研修生のブラチャックさん(グループや布のことはよくわからない)の通訳を通してでしたが、グループのメンバーであるポーディーヤさんが日



昨年の研修生ポーディーヤさん

本語を話せることで意思疎通が簡単になり、今後もやりとりが深まりそうです。また、昨年12月に新しいミシンを買ったので、グループのお母さんたちにミシンの使い方を教えたいと話していました。

草木染・手織り布を学ぶ

村には草木染の染料となる自然がたくさん。自分の家の庭の葉、道端の木の皮、田んぼの横の小川の水など、ま

でいたるところに宝が眠っているようです。いくつかの草木を混ぜて様々な色合いを出したり、色落ち防止にバナナのつぼみや灰を入れたり、昔の人はどのようにこの知恵を生み出していったのでしょうか。文書ではなく手から手へと伝わっているところがまた素敵です。私もタイで織物に初挑戦。楽しくて時を忘れるほどでした。

伝統を後世に

いま、ムシキーのグループ「チョディ」の活動の中心は、ポーディーヤさんら30代、40代の世代です。グループの集会所は、放課後や土曜日に子どもたちに染め・織り・刺繍などを教えたり、庭に草花を植えてより集いやすい場所にしようという計画があったりと、村にとっても大切な場所です。しかし、近頃では高齢のために布を織れなくなる人や、農業とその片手間に織る布だけでは生計が成り立たず、町に職を探しに行く人も多くなっています。また既製の服も簡単に買えるので、手織り布の需要も減っています。若い人たちは普段の日にカレンの伝統的な服を着る機会も少なくなり、教会の礼拝や学校の決められた日だけというように、自分たちのアイデンティティを意識するために身にまとうことが多いようです。今では昔からの難しい染めや織りの模様が出来る人は村の中でも数人だけとなり、だんだんと織り手が減っていくことが心配です。

さらに、村の人たちが着ている服やカバンは、草木染のものは少なく、色落ちの心配のない化学染料で染めた糸や化学繊維を使ったものがほとんどです。これからも村の人たちには昔からの草木染の知恵を伝えてほしい、自然や手作りのあたたかさを失わないでほしいと願います。そのためにPHDが草木染の布を買うことでその役割の一部を果たしているのかもしれない。

感謝

実際にそこに住み生活を通して見えてくるものは、本当にかげがえのないものです。ゆっくりだけれども自分の手でだんだんと形になっていく手作りの生活の楽しさや喜びは、今まで感じたことのないものでした。研修生ポーディーヤさんと出会う場をくれたPHD、そして私を快く受け入れてくれた研修生や村の人々に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。村には、私の大好きな人たちが、私を想ってくれる人たちがいます。愛しい暮らしがあります。きっと私はまたここを訪れるだろうし、たとえ村がどんな姿を変えていっても、私はこの村をずっと見続けていきたいと思っています。ここに書ききれなかった想い、写真などをブログに載せていくつもりです。時間があればどうぞご覧くださいませ。

布を売る

村のグループの自立、PHDとグループの関係のあり方は、交流が始まってからずっと考えてきていることです。最近では村の生活にも多くのお金が必要で、グループのメンバーはPHDの注文を増やしてほしいといっています。しかし日本向けの製品作りが村の生活からかけ離れたものではなく、たとえP



ムシキーのグループ「チョディ」のお母さんたちとその家族

HDがいなくなっても自立して運営していける力をつけてほしいというのがPHDの思い。その思いをどのように伝えていくか、どのように私たちが彼女たちの声を聞いていくか、今後も試行錯誤が続きます。

メーサリアンのグループ「ルチョコ」を訪れた際には、シューキヤさん('06短期生)の商売とつなげて販路を拡大できないか、タイ語のパンフレットを作ったのはどうかというアイデアも出ました。

一方、日本で売ることを考えると、日本製のものや、他のフェアトレード商品との競争もあります。平面の一枚布では売れにくく、加工したものが必要ですが、ミシンで縫うばかりでなく、丁寧な手縫いや織りの模様を生かしたデザインや、伝統的な刺繍などを取り込んで、カレンの魅力をもっともって伝えていくことができると思います。

感謝

実際にそこに住み生活を通して見えてくるものは、本当にかげがえのないものです。ゆっくりだけれども自分の手でだんだんと形になっていく手作りの生活の楽しさや喜びは、今まで感じたことのないものでした。研修生ポーディーヤさんと出会う場をくれたPHD、そして私を快く受け入れてくれた研修生や村の人々に、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。村には、私の大好きな人たちが、私を想ってくれる人たちがいます。愛しい暮らしがあります。きっと私はまたここを訪れるだろうし、たとえ村がどんな姿を変えていっても、私はこの村をずっと見続けていきたいと思っています。ここに書ききれなかった想い、写真などをブログに載せていくつもりです。時間があればどうぞご覧くださいませ。

http://somuo.blog107.fc2.com/

# PHD NEWS

## ◆会費・ご寄附寄託状況

2007年	10月	89件	¥3,418,857
	11月	103件	¥1,631,360
	12月	605件	¥4,725,652
2008年	1月	151件	¥1,931,090
			948件 ¥11,706,959

上記の通り、皆様より多くの会費ならびに年末募金のご浄財を頂戴しました。心強いご協力に心より感謝を申し上げます。引き続きのご支援をお願いします。

## ◆年末募金のお礼とご報告

皆さま方のあたたかいご支援により、前年を上回り12月、1月で560件、合計5,179,311円のご寄附をいただきました。ありがとうございました。ただし会費収入は昨年にくらべ150万円程低迷しており、苦しい財政状況となっております。次年度に向けて、さらに多くの方にPHD活動に参加していただきたく、お知り合いにPHDをご紹介いただきたく思います。資料ご請求ください。

## ◆使用済プリペイドカードの収集は終了いたしました。

引き続き残数のあるプリペイドカードのみ受け付けておりますので、ご協力ください。

## ◆2008年度スタディツアー

帰国研修生の村での頑張りに触れ、村での生活を体験することで、国際協力って何？日々の生活はこれで良いの？みんなで考えてみませんか？

-ネパール (篠山ナマステ会との共催)		
7月下旬	約1週間	約20万円
-インドネシア	8月下旬	約10日間 約18万円
-ビルマ	9月上旬	約1週間 約20万円
-北タイ	12月年末年始	約10日間 約20万円

## ◆まだまだ好評販売中！

### ドクター&ハウマッチTシャツ

オーガニックコットンの半袖ドクターTシャツとハウマッチTシャツ。体にも優しく地球にも優しい。これから春、夏に向けて1枚いかがですか？



XS, S, M, Lの4サイズ  
各2,000円  
\*ハウマッチのLサイズは完売いたしました

## ◆研修サポーター募集

4月に来日する研修生と共に考え、サポートして下さるボランティアを募集しています。農業の知識がある方大歓迎ですが、経験、知識がなくても大丈夫です。是非お問い合わせください。担当、高垣まで。

## ◆「婦人友」に掲載されました

2008年2月号の雑誌「婦人友」に松本市の会員須澤みどりさんの書かれたPHD紹介記事「生きるとはわかちあうことーPHDを支える人たち」が掲載されています。入手の難しい方はお知らせください。



## 収集でご支援ください！

使用済み切手、書き損じハガキ、ロータスクーポン、未使用切手、未使用ハガキはPHDの活動を支える大きな活動資金となります。ご自宅、職場、学校などで集めてPHD協会へお送りください。換金し、日々の郵送料として大切に活用させていただきます。

## 〇月×日のPHD協会

職員 川原 事務所内のビニール袋のカサカサいう音に敏感に反応。お菓子置場の状況に常にセンサーが働く。大切なお菓子を守るためだそう。

職員 三輪 餃子騒ぎの最中、三輪家はノロウイルスらしき腹下し。後日治った反動で食欲旺盛。午前中からお菓子を物色、川原チェックにひっかかる。

国内研修生 酒井 北九州の小学校での交流会に出席。終って数十人の子どもに囲まれ、サインを求められる。束の間の芸能人気分を味わう。

職員 高垣 広島で立ち寄ったガソリンスタンドでトイレに行った川原さんをおきざりに。あわてる姿を見て喜ぶ。決して三輪さんにはできない行動。

職員 藤野 ここ数年増加の一途だった体重がここにきて減少傾向に。走ったり、運動したりとの意図的な対策は何もしてないので、ちょっと不気味。

職員 佐々木 出入りする大学生から教わった「KY」という言葉が気に入り、事務所で連発。周囲がもうあきているのに使い続け、自らKYを実践。

(間食が多い順)

## 編・集・後・記

「ただいま」3人の研修生が事務所に戻ってきた。帰国を前にして、お世話になった方々、団体に1年の成果を報告する日程が続いている。3人の笑顔は眩しい。希望に燃えている眼だ。でも彼等の胸のうちはきっとプレッシャーで一杯なのだ。1年で学んだことを自国の土壌に植え付けることが並大抵でないことを知っている筈だから。今まではPHDの趣旨に賛同してくれた全国の善意が彼等の可能性に賭け、親身になってくれた。でもこれからはそうではない。伝統、因習の壁は厚い。負けるな！いつまでも今日の笑顔を持ち続けてほしい。希望、夢を失わない限り、君たちの道は開ける。チャユーさんの「気にしないね。心配ないね、坂井さん」の声が遅く聞こえてくる。彼等の可能性を信じ、願いながら、今日も寄せられた善意の仕分けをする私でした。

ー取り越し苦勞の絶えないボランティアー  
制作協力：菅原宗晋 増本一朗 坂井時和

ー再生紙を使用しています。

## 第26期生 4月に来日します！



ボーボーハンさん  
ビルマ・23才・男性



ペリスマンさん  
インドネシア・26才・男性



スラデさん  
タイ・45才・男性